

【出題の意図】

医療においては、1991年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが唱えた「エビデンスに基づく医療（EBM）」が一般的になり、統計的な有効性の証明に基づく治療の選択が行われている。看護においても「エビデンスに基づく看護（EBN）」の重要性が認識され、直観や経験に基づく看護から、科学的根拠や研究結果に基づいた看護へと移行してきた。EBNの基本的な考え方は、患者をケアするときに、研究から得られる最善のエビデンスを、看護の専門的知識を用いて判断し、その患者に対して良心的にかつ思慮深く使っていくことである。

しかし、客観性に重きを置くとエビデンスに判断を支配され、リスクと可能性の間で不安が募り、可能性が狭められていく感覚になる。EBNの実施にあたり重要なことは、患者一人ひとりの価値観を最大限に尊重することであり、説明を受けた上で、患者が自己決定する機会を保障されることである。客観的な情報の有用性と限界を理解することは、臨床における看護実践において、また今後の大学院での学びにおいても重要な事であり、研究成果の考え方と活用についても問う問題である。

問1. 宮野真生子が感じた「リスクと可能性をめぐる感覚」は、著者が述べるエビデンスに基づく医療に潜む落とし穴である。その落とし穴をどう読み取るか。読解力と要約力を問う。

問2. エビデンスに基づく医療や看護が行われることが当然のこととなった現代において、エビデンスに強い重きが置かれることが抱える危うさについて正しく理解し、エビデンスに基づく看護実践とはどのような看護であると考えたのかを問う。